

私幼連シンポ復習編

1

1回～3回のまとめ

- 第一回 保育を問い直す
 - 保育には、WHAT, WHYがない。「どういうときは、どうすべきか」のHOW-TOしか関心が無い。
 - 日本人には「一人称」がない。
 - すべて「三人称」のみ。
 - 「みんなやってること」という脅し文句
 - そこから脱するには、「根源的能動性」をとりもどす。
- 「根源的能動性」を失わせるもの：
 - 人は「教えられる」とき、「考えるスイッチ」を切る。
 - 教わったことおりのことをする。→チンパンジー以下だ。

2

• 第二回 「保育」とは何か

- 小川博久『保育援助論』より
 - 保育とは、幼児に對しどうかかわることが可能なかを見極めた上で、子どもが望ましい状態に達してほしいという大人の願いをもって子どもに関わることである。
 - 「望ましい状態」(What is desirable) はどこから導かれるのか。
 - 「望ましいこと (What is desirable)」は、「望まれていること (What is desired)」からは導かれない。【それが導かれるとするのは、自然主義的誤謬 (naturalistic fallacy) に陥る。
- 「自然主義的誤謬」からの脱皮
 - 村井実の「訴え」論：相手の訴えと聞き、「のぞましさ」を相互交渉できる。
- 「訴え」(「願い」)を聞いてくれる人=YOU的他人の存在
- 佐伯のドーナツ論
 - モノとの対話→モノがかかわる状況との対話→周辺状況のなかでの「のぞましさ」→「おてんとさまの目」
- まちがった「のぞましさ」：「みんな」のやる通り
 - 「わたしたち」、「みんな」がやるのが、「のぞましいこと」
 - YOU的他人の不在

3

• 第三回 子どもを人間としてみる

- NHKスペシャル：ヒューマン なぜ人間になれたのか
 - 人は、苦しんでいる他者を気遣い、援助することを「よいこと」とする。
 - ハムリンの実験：生後6ヶ月の赤ちゃんでも、親切〇、意地悪×の判断ができる。
 - 赤ちゃんは母親を気遣う(抱き上げへの「協力」)
- 私たちは、子どもを「人間として」みてこなかった。
 - 子どもを「教える対象」として見てきた。
 - 村井実の『日本教育の根本的変革』：永久保利通の「学制」設定：日本人の無知蒙昧、無気無力を「教化」でたすべき→教化主義の徹底
 - 本田由紀の『教育は何を評価してきたのか』：今日の社会のいきづらさの原因は、國が「望ましい人間像」を制定し、それを教育の根幹においた。→学力競争、態度・資質の一律的強要。
 - 「発達」というトラウマ
 - ピアジェ発達論を保育の指針とした。
 - 「実験」で発達段階を設定
- 子どもを「人間として」みる
 - 「まりさんのハンバーグ」
 - 「能力」というモノは存在しない。
 - 鑑識眼的評価(目標準拠型評価からの脱皮)：評価基準は創発され「後追い」する。

4

保育における 「二人称的関わり」とは

東京大学・青山学院大学名誉教授
佐伯 胖

神奈川県私立幼稚園連合会研究特別委員会6部会連続講座2021.1.29

5

佐伯が「二人称的かわり」の 重要性に気付いたとき。

6

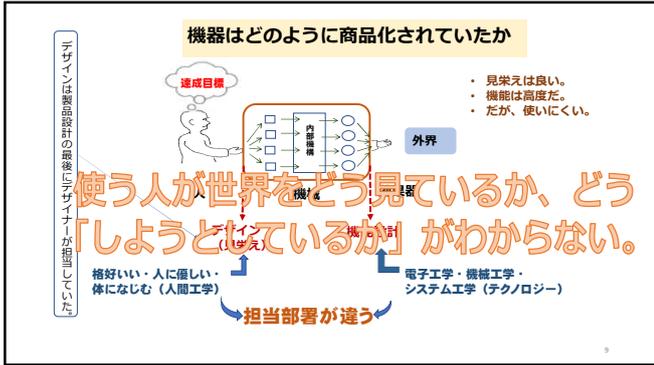
1989年以來の提言
佐伯の「ドーナツ論」

7

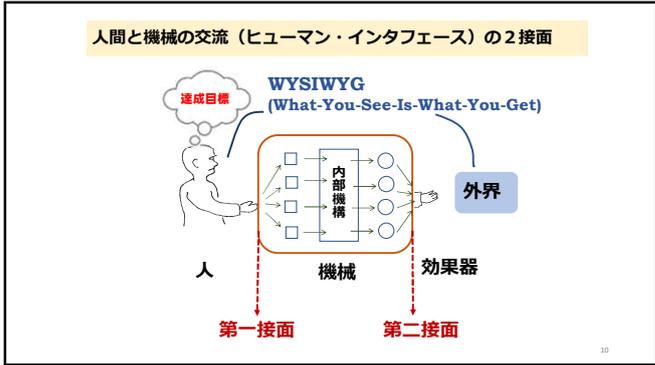
ドーナツ論の歴史

- 佐伯胖 (1989) インターフェイスと認知工学 『情報処理』 30 (1), 2-14.
- 佐伯胖・佐藤学・苅宿俊文・NHK取材班 (1993) 『教室にやってきた未来』 日本放送協会出版会, pp. 144-147.
- 佐伯胖 (1995) 『「学ぶ」ということの意味』 岩波書店, pp. 65-78.
- 佐伯胖 (2001, 増補改訂版 2014) 『幼児教育へのいざない』 東京大学出版会, pp. 153-159.

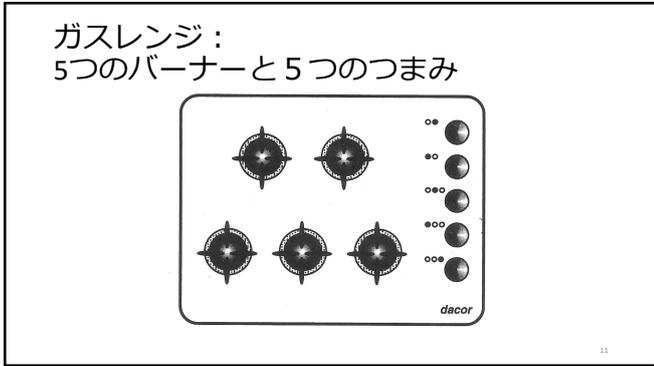
8



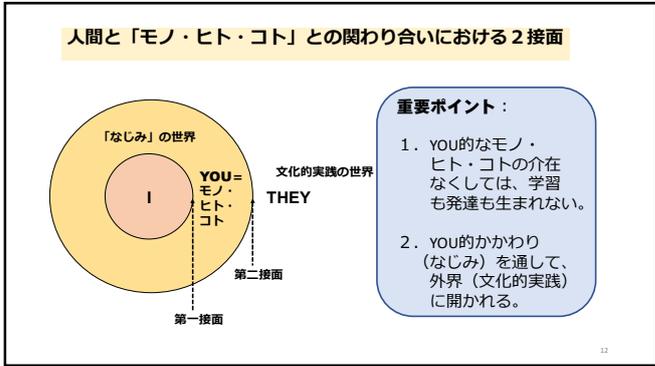
9



10



11



12

「佐伯さんと同じようなことを 言っている人がいるよ。」

- 高木光太郎氏（青山学院大学教授、当時の同僚）から言われた。
- Vasdevi Reddy. *How Infants Know Minds*. Harvard University Press, 2008.

13

13



ヴァスデヴィ・レディ 著 佐伯 詳 訳 『驚くべき乳幼児の心の世界—「二人称的アプローチ」からみえてくること—』 ミネルヴァ書房 2015年

Vasdevi Reddy. *How Infants Know Minds*. Harvard University Press, 2008.

14

14

他者との関係作り

一人称的かかわり
三人称的かかわり、そして
二人称的かかわり

15

15

一人称的かかわり

- 他者が感じたり考えたりすることは、自分が感じたり考えたりすることと基本的に同じだとする。
- 「そうそう、わたしもそう思う!」、「そうよね、あれはイヤよね。」
- 「同じ」であることで、仲間意識を高める。
- いつも、「同調確認」をしていないと、不安になる。

16

16

三人称的かかわり

- 他者の考えや行動は、パターン（類型）、概念、**理論**、「よくある話」が当てはまるかぎり、あてはめて、理解する。
- 「あの人は、これこれこういう人なんだ。」、「ああいうタイプの人って、いるよね。」
- 解釈先行型理解：相手を見るとき、すでに解釈ができています。
- 問題1：やはり「対話」ができない。「解釈確認」にばかり関心が向く。
- 問題2：情緒的理解が欠落。（「どう感じているか」がわからない。）
- 問題3：「わたしたち」以外はみんな「あの人たち」（カンケイナイ）
→一人称の裏返し

17

17

二人称的かかわり

- 二人称で関わる他者（you）とは、相手が自分にとって「特別な他者」とし、
- 特別な情感をいだく（単なる情報交換以上）
- すぐに応じるべき対象
- まず、丸ごとその人全体を知ること。
 - 部分というものは全体あつての部分である。
- 相手自身が、そういう（you的な）かかわりを受けていることを感じ取る。

18

18

二人称的かかわりの説明

19

新生児の舌出し模倣 (生後数時間でも見られる)



20

19

20

「舌出し」を二人称的にみる

赤ちゃんは、「対話」を求めているのだ。

21

Nagy&Molner (ナジ&モナル) 実験

Nagy, E., & Molner, P. (2004). Homo imitans or homo provocans? Human imprinting model of neonatal imitation. *Infant Behaviour and Development*, 27, 57-63.

- ①モデルの舌出しと赤ちゃんの模倣ということを数回くりかえしたあと、
- ②モデルは舌出しをしないで赤ちゃんをただニコニコ見つめる。
- ③赤ちゃんはしばらくじっとモデルの顔をじっと見つめているが、しばらくすると今度は自分から舌出しを始める(誘発的舌出し)。
- ところで、①で、赤ちゃんは模倣行動の時、心拍数は上がる(自分から舌出しをしよう努力する)。ところが②③のときは、当初モデルの舌出しを期待し、待ち望んでいる様子で、じっと集中して待機するため、心拍数が定常状態より低下する。それから心拍数をあげて(モデルに舌出しをさせよう)「誘発的」模倣をすると心拍数は急激に上昇する。ちなみに赤ちゃんが何かに集中して「期待」しているときに心拍数がさがることは過去のさまざまな実験からわかっている。モデルが舌出しで応えると①と同じ状態になる。

22

21

22

これは、どういう意味か?

(赤ちゃんになりかわって、お答えします。)

- 見知らぬおじさんが目の前で舌をだした。
- この人は、ボクに同じことをして返してくれと要求しているに違いない(「対話の要求」と解釈)。
- それでボクは舌を出してあげた。
- 今度はこのおじさんが舌出しを返してくれると思って待っていた。
- なのに、じっとまっているのにちっとも返してくれないので、「舌出ししてよ!」と訴えて、(誘発的に)こんどはボクから舌出しをしてみせた。ドーヨ! アンタも舌出ししなさい!

赤ちゃんは、二人称的対話をもとめている。

23

新生児の「舌出し」は、 情感的交流における「応答」である。

- ①情動が先導して、相手の「こちらにしてくれている行為」をワガゴトとして、身体全体で感受する。
 - ・知覚的/情動的/自己受容感覚
(perceptual/emotional/proprioception)
- ②自分がそれを「感受している」ことを相手に(情感込みで)伝えたい。
- ③結果的に、「模倣がえし」になる。

24

23

24

情感的に「応じない」ことの 罪深さ

— 「静止顔実験」から Reddy が学んだこと —

25

25

静止顔実験とは

- 赤ちゃんとの非言語的なやりとりが「会話的 conversational」なものか（疑似-会話pseudo-conversation なのか原-会話proto-conversationか）つまり、親は赤ちゃんとのやりとりを「会話」の幻想いだいて「会話している」としているに過ぎないもので、赤ちゃんの応答（むしろ「反応」）は母親の応答と無関係に、勝手に表出しているものなのか—を確かめるため、赤ちゃんとの「会話」風のやりとりの途中で、表情を全く変えない（ただし「微笑みの表情」を維持する）としたら、赤ちゃんはどのように反応するかを調べるという実験。

26

26

（生後6週間目）

素敵な“おしゃべり”のやりとりの時間の間、シャミーニはベッドに横たわり、私は彼女にかがみこんでいた。私は自分の顔の動きを止めて、彼女を見続けながら、喜びの表情をうかべるが全く動かないようにした。

彼女は私を見続けて、ちよつとほほえんだり声を出したりした。そして何の応答も得られないとまじめな顔になり、ちよつと視線をそらすとまた私を見て、ほほえみ声をあげた。そしてまたまじめな顔になり視線をそらした。見てと、何回か繰り返した。全部で30秒ほど続いたがもつと長く感じた。

私は何も応じないことに耐えることができず、ほほえみかけ、彼女に話しかけ、あやまるために抱きしめようとのりだした。そのとき、彼女の顔はしわくちゃで泣き出した。私はショックを受けてうろたえとてつもなく心を痛めた。彼女は本当に私のことを心配してくれていた！（she actually cared!）

この出来事は私の（研究者としての）自己意識から抜け出すよう強く揺さぶり、乳幼児研究の大きなターニングポイント（転換点）となった。

27

27

Reddy の決意

- 乳幼児とかかわって、どのような情動が喚起され、それが赤ちゃんの生活経験にどんな意味があるのかをよく知るには、共感の内に情動的に巻き込まれる（to be involved in）必要がある。
- 赤ちゃんの行為や感情（feelings）に、**敬意をもってかかわる（'respectful' engagement）** ことなしに、赤ちゃんについて学ぶことはできない。

「二人称的関わり」の目覚め！

←

28

28

なぜ、心理学は「三人称的」になったか。

それは、心理学は「科学」でなければならない、としたことによる。

科学は、自然を変えるための技術に使える理論、原理をもとめる。

「どうすると、どうなる」を知るのが科学

当然、1個のデータではなく、集団の特性をみる

当然、「どうすると、どうなる」が探求課題になる

当然、対象を、操作し、変容させる対象としてみる

↓
「三人称的アプローチ」をとらざるを得ない。

29

29

「発達心理学」が見てきたこと ～ピアジェ心理学の保存課題～

“子どもは「その世界」をどのように見ているか”をまったく無視して、実験者の知りたいこと（仮説の検証）だけを知ろうとしてきた。

つまり、「二人称的まなざし」の欠落

30

30

ピアジェ発達論の基本思想

- 生物学（とくに、発生学）主義：
 - 生物の成長と同様、あらかじめ定められた段階を、生体内の“自然な”変化としてたどる。人間として持って生まれた生物学的仕組みに従って発達する。
- 表象主義：
 - 「思考」=「頭の中のシンボル操作」
 - 発達を研究するとは、「シンボル操作」のシエマ（様式）の加齢による精緻化。
- 個人能力還元主義：
 - 発達の段階は、基本的に生物の個体内でのシエマがどこまで構成されているかに依存する。
- 個人的構成主義（Individual Constructionism）

31

いわゆる「保存課題」のねらい

- 発達段階（=内的シエマ）の形成段階を幼児の問題解決行動の観察から同定
 - 子どもの行動観察から、その段階で形成されているであろうシエマを予想する。
 - 「シエマ」理論から、この段階ではこの問題解決は無理、この問題解決は可能ということを予測し、それを実験的に検証する。
- シエマの例（**科学者の思考を規範にして**）
 - 自己中心性（自分の視点に固執）→「三つ山」問題
 - 数のシエマ（一対一対応で“多い”、“少ない”を判断）
 - 数の保存実験
 - 操作の可逆性（心的に「もとに戻す」）→量の保存

32

「三つ山問題」、 「数の保存」、 「量の保存」

33

標準「三つ山問題」

- 幼児の目の前に<図1>のような3つの山の模型が置かれる。
- 上から見た配置は<図2>であるが、幼児はあくまで<図1>の模型を正面から見るだけである。

34

標準「三つ山問題」（つづき）

- 実験者は人形を、山の模型の正面、左側、右側、背面（向かい側）に移動させて、
- 人形がそれぞれの地点からの山の模型を見た場面について、4つの方向（正面、左側、右側、背面）から見たスケッチ画のうちの1枚を選ばせた。
- 結果：4～5歳児は、すべて「正面からのスケッチ」（今自分が見えてる様子）を選んだ。7～12歳児は、練習しているうちに、正答できるようになって行った。

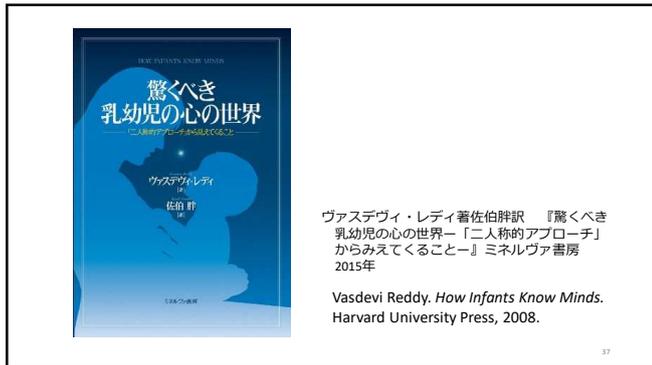
35

ボークの実験（3～4歳児）

標準「三つ山問題」正答率：
3歳児42%
4歳児67%

正答率80%以上

36



ヴァスデヴィ・レディ著 佐伯胖訳 『驚くべき乳幼児の心の世界—「二人称的アプローチ」からみえてくること—』 ミネルヴァ書房 2015年

Vasdevi Reddy. *How Infants Know Minds*. Harvard University Press, 2008.

37

発達心理学者Vasdevi Reddyの嘆き

- 自らが赤ちゃんを出産してわが子と親しくかかわって、おどろいた。これまで発達心理学のテキストでは、赤ちゃんは生後2~3ヶ月になるまでは他人との関わりがわからない、3~4歳になるまでは、他人の心を自分とちがうものとは理解できないとしているが、
- 母親として見ると、生後まもなくから、赤ちゃんははっきりこちらの微笑みに「応える」し、1歳ぐらいでも人（こちら）の心を見透かして、おもしろがらせたり、わざとふざけたり、見せびらかしたり、期待をもたせて裏切ったり、などなど、いじわるやずるがしこさをふくめて、まさに「この子、人間なんだ！」と思わせられた。
- 疑問：「どうして、“心理学”では、赤ちゃんの、こんなにまで（小憎らしいまでに）人間くさいことを、見逃してきたのか？」

38

Reddyの発見

- 心理学では、赤ちゃんをモノのように観察し、モノのように「反応させて」、そのモノの特性を、**自分と切り離して**、理論付けてきた。
- これは、赤ちゃんを「三人称的に」見てきた。
- しかし、我が子を見る母親は、あかちゃんを、はじめから「対話の相手」として、名前呼びかけ、それへの「反応」（反射行動）は、「応答」だとみなしてかかっている。
- 赤ちゃんの側でも、「心理学的観察者」とは「個人的関わりをもたない、もてない他者」だが、母親とは「個人的関わりをもつ」他者（すなわち二人称的他者）とみなして、「個人的かかわり」をつろうとしている。

39

赤ちゃんは私たちが
「人間として」（二人称的関わり
の相手として）みている！

40

新生児の舌出し模倣 (生後数時間でも見られる)



Meltzoff, A. N., & Moore, M. K. (1977). Imitation of facial and manual gestures by human neonates. *Science*, 198(4312), 74-78.

41

Nagy & Molner (ナジとモナル) 実験

Nagy, E., & Molner, P. (2004). Homo imitans or homo provocans? Human imprinting model of neonatal imitation. *Infant Behaviour and Development*, 27, 57-63.

- ①モデルの舌出しと赤ちゃんの模倣ということを数回くりかえしたあと、
- ②モデルは舌出しをしなくて赤ちゃんをただニコニコ見つめる。
- ③赤ちゃんはしばらくじっとモデルの顔をじっと見つめているが、しばらくすると今度は自分から舌出しを始める（誘発的舌出し）。
- ところで、①で、赤ちゃんは模倣行動の時、心拍数は上がる（自分から舌出しをしよう努力する）。ところが②③のときは、当初モデルの舌出しを期待し、待ち望んでいる様子で、じっと集中して待機するため、心拍数が定常状態より低下する。それから心拍数をあげて（モデルに舌出しをさせよう）「誘発的」模倣をすると心拍数は急激に上昇する。ちなみに赤ちゃんが何かに集中して「期待」しているときに心拍数がさがることは過去のさまざまな実験からわかっている。モデルが舌出して応えると①と同じ状態になる。

42

これは、どういう意味か？

(赤ちゃんになりかわって、お答えします。)

- ・見知らぬおじさんが目の前で舌をだした。
- ・この人は、ボクに同じことをして返してくれと要求しているに違いない(「対話の要求」と解釈)。
- ・それでボクは舌を出してあげた。
- ・今度はこのおじさんが舌出しを返してくれると思って待っていた。
- ・なのに、じっとまっているのにちっとも返してくれないので、「舌出してよ!」と訴えて、(誘発的に)こんどはボクから舌出しをしてみた。ドーヨ! アンタも舌出ししなさい!

赤ちゃんは、二人称的対話をもとめている。

43

43

なぜ、心理学は「三人称的」になったか。

それは、心理学は科学でなければならない、としたことによる。
科学は、自然を変えるための技術に使える理論、原理をもとめる。
「どうすると、どうなる」を知るのが科学

当然、1個のデータではなく、集団の特性をみる
当然、「どうすると、どうなる」が探求課題になる
当然、対象を、操作し、変容させる対象としてみる

「三人称的アプローチ」をとらざるを得ない。

44

44

レディの 「二人称的かわり」の意味

レディ著佐伯訳『驚くべき乳幼児の心の世界』の原題

“How Infants **Know** Minds”は、もともと、
“How Infants **Feel** Minds” だった!

Other minds as ‘felt’ rather than just (intellectually) ‘known’

45

45

他者(他物)を感じ取る (*feeling for*)

・フォックス・ケラー著石館三枝子ほか訳『動く遺伝子』晶文社、1987年(バーバラ・マクリントック伝)の原題は、*Feeling for the Organism* (生物を感じ取る)だった。

・「感じ取る」知り方の中核にあるのは、他者(他物)を自分と同化(自分の感じ方・知り方の延長=“*Like-Me*”)によるのではなく、他者(他物)に**惹きつけられる**こと(“*I Like You*”)だ。

・「おもしろい!」という感じ方

46

46

・ほんとうに「知る」ということは、
(心で) 見ること = (心で) ふれること



「感じる」という知り方

47

47

「さわる」と「ふれる」の違い

伊藤亜紗著『手の倫理』(講談社、2020年)より

48

伊藤亜紗著『手の倫理』
(講談社, 2020年) より

「さわる」と「ふれる」の違い

49

さわる

- ・傷口にさわる
 - ・なんだか痛そう
 - ・(相手は) 思わず患部を引っ込めなくなる。

- ・一方的かかわり
 - ・物的 (モノ的) なかかわり
 - ・相手の「同意」は想定されない
 - ・感情的交流はない

接触距離 ≥ 0 (ゼロが最小)

ふれる

- ・傷口にふれる
 - ・状態を見たり、薬をつけたり
 - ・(相手は) 多少痛くても、我慢しようかなと思う。

- ・相互的かかわり
 - ・人的 (ヒト的) なかかわり
 - ・相手の「同意」が想定される
 - ・感情的交流がある

接触距離 ≤ 0
(マイナスの距離)

50

三人称的関わり

- ・傷口にさわる
 - ・なんだか痛そう
 - ・(相手は) 思わず患部を引っ込めなくなる。

- ・一方的かかわり
 - ・物的 (モノ的) なかかわり
 - ・相手の「同意」は想定されない
 - ・感情的交流はない

接触距離 ≥ 0 (ゼロが最小)

二人称的関わり

- ・傷口にふれる
 - ・状態を見たり、薬をつけたり
 - ・(相手は) 多少痛くても、我慢しようかなと思う。

- ・相互的かかわり
 - ・人的 (ヒト的) なかかわり
 - ・相手の「同意」が想定される
 - ・感情的交流がある

接触距離 ≤ 0
(マイナスの距離)

51

ヘルダーの触覚 (“ふれる”感覚) 論

- ・ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー (Johann Gottfried von Herder, 1744-1803) の「彫塑」論より:

- ・塑像を粘土でつくる彫刻家の指が粘土に触れているとき、触覚は対象に「**内部に入り込むもの**」として捉えている。
・**何かをしようとする衝動や感情の気配、「勢い」のようなものを感じとる。生命や魂のたえず動いてやまない流れを捉える。**

52

<伊藤氏のヘルダー「触覚」論解釈>

たとえば向こうから走ってきた子供を抱きとめるとき。その子供が腕をすり抜けて再び走りだそうとしているのか、それとも腕の中で安心しがっているのか、私たちは、子供の中にある意思の動きを、その体にふれることによって、感じ取ることができます。そこから、子供の感情も読み取ることができるでしょう。足をふんばり、腕に対して反発するような力が入っているならば、その子供は一緒に遊びたがっているにちがひありません。逆に力が抜けてこちらの腕に体重を預けてくるなら、安心しがっているか、しばらく安全な腕の中で「充電」したいかです。

(中略)

そう、私たちは人の体にふれることで、その表面についての情報、つまりその人の肌の柔らかさやすべらかさといった物理的な質についての情報を得るだけでなく、**いままさに相手がどうしたがつているのか、あるいはどうしたくないと感じているのか**、その衝動や意志のようなものにふれることができるのです。これこそ、ヘルダーが「生命」や「魂」と呼んでいた、体が見せる生々しいうごめきにふれる触覚です。

伊藤著『手の倫理』pp. 76-77.

53

伊藤が引用する坂部恵*

* 『「ふれる」ことの哲学——人称的世界とその根底』、岩波書店、1983年。

- ・ふれるという経験は、いうまでもなく、触覚に限られるものではない。
- ・より根源的な、おそらくはすべての感覚におよぶひろがりをもった基層にあるものにほかならない。
- ・「ふれる」の対称性(坂部は「**相互嵌入**」と呼ぶ):
「ふれることは直ちにふれ合うことに通じる」
- ・「に」が用いられるのは、「ふれる」が、その他の感覚とは違って、**主体と客体を明確に分離せず**、内部に入っていく感覚だからだ、と坂部はいう。

54

「ふれる」（二人称的関わり）は相互の**信頼**が前提である。

55

「信頼」と「安心」の違い

山岸俊男『安心社会から信頼社会へ』中公新書、1999年より

- ・**針千本マシン**：喉に埋め込むタイプの機械で、その人が嘘をついたり約束を破ったりすると、自動的に千本の針が喉に送り込まれる。

さて、ある人間の喉にこの「針千本マシン」が埋め込まれているとします。そのことを知っている者は誰でも、その人間が絶対に、少なくとも意図的には嘘をついたり約束を破らないと確信できるでしょう。

「不確実性」が最少

これが、「安心社会」だ。

56

信頼は不確実性の下での「賭け」

- ・信頼は、相手がどう反応するか**不確実**であるにもかかわらず、「よくあろうとしている（はず）」に**賭ける**こと。
 - ・当然こちらは、相手にとって「よい」（と思われる）行為を返す。
- ・信頼は、相手も、こちらが何をするか**不確実**であるにもかかわらず、「よくあろうとしてくれる（はず）」に**賭ける**。
 - ・当然、あちらも、こちらにとって「よい」（と先方が思っている）行為を受け入れる。

（信頼し合う）
信頼は、双方向的に成立

57

「信頼」と「安心」の違い

- ・安心は相手の喉に「針千本マシン」がついている。
- ・信頼は、相手への賭けだ。
- ・信頼は、「わからないけど大丈夫」（アブナイイジョウブのリスクのなかで、ダイジョーブに賭ける）
- ・**信頼は、相手がどのような状況にいるかを「客観的にも（おてんとさまの目で）」見える。**
- ・その状況の中で、私がどのように見られるかを想像し、「わからないけど大丈夫」と見られていることへ賭ける。

（二人称的）三人称の目

58

「ふれる」には「信頼」が前提

- ・**ふれる人は、まずその相手に信頼してもらわねばなりません。**
 - ・ふれられることは、相手との距離がとれなくなることで、相手から傷つけられるかもしれない。
 - ・ある病院で、胸の計器が外れているのに気づいた看護師が、何も言わずに患者さんの体にさわったところ、足蹴りにされた。
 - ・退院時にかかりつけ医に渡す情報提供書には、「この患者には暴力行為がある」と書かれていた。
 - ・患者は、「ふれて」ほしかったのに、看護師は「さわった」。
- ・ふれられる側は、ふれる側に対する信頼がなければならない。
 - ・ふれる側の行動によって、自分がひどい目にあうかもしれない。
 - ・**「ふれられる」とは、接触のデザインに関して、主導権を相手に渡すこと。**

59

「ふれる」の中の「さわる」：（二人称的）三人称

- ・驚田清一は、「聴く」ということの触覚的側面を論じるとき、「ふれる」のなかに、実は「さわる」が含まれていることを指摘している：相手に触れながら、そこにある**「異質さ（わからなさ）」**にさわっている。
 - ・“自他の溶解としての「ふれあい」よりもむしろ、異質さそのものに「ふれる」こととしての「さわる」こと、つまり、**距離をおいたままの接触**のなかにこそ、より深い自-他の交感が訪れる。”
 - ・距離をおいたままの接触（＝「一步離れた寄り添い」）こそが、自他の溶解よりも深い他者との関わりがある。
 - ・村瀬孝生は、それを**「尊さと畏怖」をもつ「ふれる」**だという。

60